

第33回 武蔵野文学賞「高校生部門」 小説部門

選考委員 三田 誠広、宮川 健郎、町田 康、楊逸、土屋 忍

■ 小説部門 全体講評（土屋 忍）

今年の小説部門には、特によい作品が集まった。それは予備選考の段階から明らかだった。予選を通過したものの惜しくも候補作には選ばれなかった2作（「あの七色の夏へ」「木下藤吉郎の誕生」）もまた印象に残る作品だった。

さて、候補作は、「TEENAGERS' HERO」「骨になる」「アノマロカリスと春愁少女」「らんちゅう」「君に聞こえない音」「桃と骨」（受付順）の6作品であった。最終選考は、土屋忍、町田康、三田誠広、宮川健郎、楊逸（五十音順）の5名でおこなった。選評と点数を持ち寄り、総点のもっとも高い「君に聞こえない音」が最優秀に選ばれた。次に点数の高い「桃と骨」を審査員特別賞に選んだ。点数的には次点なので優秀賞とするのが順当であろうが、「桃と骨」には3名の選考委員が最高点をついている。これは特筆すべきことである。点数化された序列を超えたところに作品の価値はある。ということで審査員特別賞とした。このあと披露される各委員の選評に耳を傾け、やがて刊行される予定の作品集で読んでもらえると2作それぞれの美点、数字では比較することができない特長がみてとれると思う。

全体として、思わずせつなくなり、どこか別の場所に連れて行ってくれるような読後感をおぼえる作品が多かった。拒食症、いじめなど、現代の生きづらさを抱えた中高生の生活、大人や社会への拒否感、周囲との違和、居場所や置き場所を見失ったような感覚、最近特に増えている生物描写など、内容をまとめて並べてしまえば既視感があることが多いのだが、にもかかわらず没入できたのは、文章がすぐれているからだ。細部の描写に輝きがあり、小説の文体がそこにあり、完成度が高いからだ。残念ながら受賞に至らなかった他の4作品も、才能を感じる部分があるという委員の評価があった。次作以降に期待したい。

付記：武蔵野文学賞「高校生部門」の選考が終わって12月13日に授賞式を開催するまでの間に、第57回新潮新人賞の結果が『新潮』11月号誌上で発表されました。そこで「あなたが走ったことないような坂道」で新潮新人賞を受賞されたのは、「桃と骨」で審査員特別賞を受賞した有賀未来さんでした。連続受賞、誠におめでとうございます。

■ 三田 誠広

技術と才能に驚嘆

候補作の水準が高く、どの作品も例年なら最優秀賞に選んでもいいと感じられた。結果としては、最優秀賞に加えて審査員特別賞を設けて二作を表彰することになったが、どちらの作品も技術的な安定感と、着眼の冴えがあって、たぐいまれな才能を感じさせた。自信をもってこの二作を推奨したい。

桑野桃香さんの『君に聞こえない音』は文体の安定感と展開の巧みさに圧倒された。クラスのなかでイジメに遭いそうな二人の女子の交流を描いた作品で、作品の観点となっていはるヒロインの女子の繊細な感性がしっかりと描かれている。こういうタイプの女子がイジメに遭いがちだということも伝わってくる。そこに鳥に異様なほどの関心をもった女子が登場して、作品が大きくふくらんでいく。自分の関心をだれかれなく吹聴するこの女子は、いまなら発達障害と言われてもおかしくないほどの自分勝手なところがあるのだが、イジメの標的になりがちであることから、ヒロインのシェルターのような役割を負ってくれるので、ヒロインは好意をもって受け容れる。

この他人の思惑にはとらわれずに鈍感なほどに自己主張する女子のキャラクターがしっかりと描かれていて、ヒロインとの間に奇妙な友情が芽生えていく。ヒロインには打算的なところもあるのだが、好意と途惑いが混じった微妙な距離の取り方が、作者の筆致によって鮮やかにとらえられている。一般的にいえばイジメをテーマとした作品は、被害者意識からセンチメンタルな文章になりがちなのだが、この作品の作者の文体は冷静で客観的だ。この文体の安定感を何よりも評価したい。さらに、物語の展開によって、二人のキャラクターに新たな視点が入っていく。このように作品のなかの時間の経過によって登場人物のキャラクターに微妙な変化が加わるというのは、技術的に高度なものが必要で、それを軽々と実現している作者の筆致に才能を感じた。これは天性の物語作家だと思われる。ファンタジーに逃避するのではなく、リアルな素材からこれだけの物語展開が書けるというのは、たいへんな才能だ。これからも社会性のあるさまざまなテーマを見つけて作品を書き続けてほしい。

有賀未来さんの『桃と骨』にも圧倒された。進行性の不治の病に冒され寝たきりのままで死に近づいていく妹と、ひたすら介護にあたっている姉との、絶望的な状況を設定した作品だが、不思議なことにセンチメンタルなところがまったくない。といって登場人物たちを突き放すのではなく、読者の共感を呼ぶような繊細な描写もあるのだが、全体が民話のようなほのぼのとした語り口なので、読者は暗くならずに物語を読み進むことができる。その文体の安定感にも途方もない才能を感じてしまった。語り口は民話的なのだが、前半はしっかりとリアリズムで書かれていて、読者を作品世界に惹き込んでいく。

作品の後半に到って、この作品はややブラックなファンタジーに傾いていくのだが、その推移も自然で、読者は違和感なく読み進むことができる。象牙の印鑑を食べた老人が象に変身するという、とぼけた挿話が伏線になっていて、やがて鳥の骨を食べた妹に羽根が生える

というエンディングに向かって話は進んでいくのだが、その語り口も安定していて、静かになめらかに話が進行していくので、前半のリアリズムと後半のファンタジーが切れ目なくつながっている感じがする。これも文体の安定感がもたらした功績で、技術的な高さを感じることになる。結末がファンタジー的なので、リアリズムの作品に慣れた読者にとっては意外に思われるのかもしれないが、カフカ、安部公房、多和田葉子など、評価の高い過去の文学のなかには、リアリズムから一步抜け出すことで文学の地平を切り拓いた作家も少なくないので、この書き手の将来にも大きな期待をもって見守りたいと思う。

■ 宮川 健郎

・「TEENAGER'S HERO」

「俺」は、作品の最後に置かれたヒロからの手紙「29→30」を読んだことから、語りはじめたのだろう。29歳から、高校2、3年生を振り返る眼差しの語りになっている。高校時代の渦中のことを語りながら、もう、そこにはいないという、生々しさより抒情に傾いたものになっていて、そこが残念だ。抒情性は、タイトルにもよくあらわれている。手紙の引用で終わってしまうので、突然ぶつんと終わった印象もある。ただ、文章がうまい。全体は「俺」のモノlogueだが、路地のけんかのあとの場面は急に戯曲のようになって、こういうところもうまい。「子供」を手放したくないという主題にはあまり関心をもてないのだが。

・「骨になる」

大学進学のために、間もなく家を出る「ぼく」が語る。拒食症の妹のいる家族のつらい緊張感のある日々が生々しく語られていく。その家族を抜け出すことについて、「ぼく」は葛藤を重ねているが、「ぼく」がその葛藤をかかえたままで作品が終わることにはリアリティーを感じるし、そこが、たいへんすぐれていると思う。

・「アノマロカリスと春愁少女」

時折詩がはさみこまれる構成には魅力を感じるが、著者流の「女生徒」のような文体には既視感があり、あまり親身になって読めなかった。

・「らんちゅう」

児童養護施設で飼われている、らんちゅうが、そこで暮らす「僕」にも重なってくる。「僕」の性の目覚めなども、感覚をともなった表現で書かれている。そこがすぐれているが、全体にスケッチふうで、やや物足りない。

・「君に聞こえない音」

鳥に興味があって、その話ばかりしていて、いじめられている明希は、実は、教室のなかの声をよく聞き分けている。そうした明希の造型がたいへん新しく、そこに作品の奥行きも生まれた。

・「桃と骨」

妹の背中に羽が生えるという結末がほんとうだと思える作品になっていない。どう読んでいいか、むずかしい作品である。

■ 町田 康

「TEENAGER'S HERO」

三人の高校生の関係が好ましく描かれ、その性格の違いがよく描き分けられている。ストーリーの進み行きに奉仕する「キャラ」でなく、生きた人間として描かれて在った。情景がうまく書けていた。

その一方で、HIRO が大人を憎み、子供に美を見出して、年齢を重ねること、大人になることに絶望していること、それに言葉が費やされず、説得性を欠き、単なる「設定」になってしまっている。「説明」してしまっている。

表現、文章に独特の良さがあるが、不注意と思われる表現が目に付いた。

「骨になる」

精神的な問題を抱える妹を中心として、父、母、姉、「ぼく」のそれぞれの立場と人格が明確になり、人の本性が露わになっていく造りはよい。ただし、それぞれの言動が明確に描かれず、また、態度に一貫性や必然性がなく、その内奥にある矛盾をえがくに至、前の前の段階に留まって、作品そのものが混乱してしまっている。言葉遣いの誤りが多く見られた。

「アノマロカリスと春愁少女」

思春期特有の気分と感情を詩と幻想とメルヘンとして巧みに描いている。

抒情や耽美に流れがちな内容・題材を言葉によって確と現実に繋留している箇所が何箇所かあり、それは哄笑を誘いすらする。語彙が豊富で言葉遣いも正確。結末の決意に至る過程が自然である。「先生」へ語りかける形式も破綻がなく成功している。桜、アノマロカリス、湖、その他のモチーフは陳腐だが、右に言うようにところどころに現実に結びつくモチーフが現れてバランスがとれている。

「らんちゅう」

自らの性衝動や屈辱的な記憶を小さな生き物や植物、風景に託して豊富な語彙で描くも、ただし、らんちゅう、イトミミズ、オリーブなどと、内面の意識がうまく結びついておらず未消化だった。結末に、清潔な世界から脱落する様が描かれるが、それが語り手になにを齎しているのかが伝わらない。

又、横書きなのはどういう訳か？そこになんらかの文学的意図があるのだろうが、よくわからなかった。この文章であれば縦書きの方がよいのではないか。

「君に聞こえない音」

言葉に身体と実感がある。およそ中学生らしくない、ですます調の台詞回しがかえって真実味を与えている。設定は青春的だが、どの人間にもあてはまる心の動きが作品の根柢に横たわる。

鳥のモチーフが効果的であるが、立花がなぜこれほどに鳥を偏愛しているのか、に説得力が無く、その他の情報による補強が無いので、強引な設定感、無理矢理なキャラ感が残る。もっと立花を人間として立体的に描くべきだったか。苛めグループはより苛烈であるべきであった。それが不足しているため、杉村の二択の葛藤が弱くなっている憾みがあった。

「桃と骨」

桃のみずみずしい手触り、骨の乾いた手触り、その他、官能的な表現がすばらしい。人間が生きている時に感じる感触が、足の麻痺なども含めて、生々しく伝わってきた。それを可能にしているのは作者の、すでに完成された文体である。祭の日に買いもとめ二日で死んだ鳥を掘り起こし、その骨を洗って妹に食べさせる、というところがすばらしい。すべての細部がすばらしい。新しい人の新しい表現がここにあった。

■ 楊逸

『君に聞こえない音』

中学校に上がった「私」、小学校時代の「いじめグループ」を怖がって不安になる中、ある時鳥が好きすぎて、時間場所構わずずっと「鳥の話」をする「明希」に出会い仲良くなるが、そんな「空気の読めない」彼女が「いじめグループ」の次のターゲットになったのを知って距離を取り始める、、。

いじめ問題を描く作品で、「鳥オタク」の登場に、ある種の「意外性」も期待して読んだ。鳥が好きすぎるという「明希」キャラは少し「人間味」が薄くも感じたが、「それが個性」だと受け止めて読んだ方が良いかもしれない。

『桃と骨』

足の病で、不自由になったのち寝たきりにもなってしまった「妹」と、彼女を看病し、一緒に過ごすために仕事をやめた「私（姉）」の物語。

「死んだらどうなる」という問いを、嫌がりながらもなんとなく、妹の死を悟って、「なりたいものの骨を食べれば、死んだらそれになれる」という噂を信じて、剥いた桃に「妹」がなりたいという「鳥」の骨を入れて食べさせるという。

「妹」がかかったのは足の病気（病名は明らかにしていない）なのに、なぜ寝たきりになりやがて「死ぬ」云々のレベルになったプロセスについての描写がなく、「発熱」のシーンがあるにせよ、普通なら風邪とか肺炎とかを連想してしまうかもしれない。最後まで読めばそのすべては「妹の背中には羽が生えていた」という結末に繋げていくためだったとわかった。

結末のシーンをこだわって書かれた作品なのだろう。「私」の努力によって不自由な足の代わりに「妹」は「羽」を手に入れたのだ。